

毎日タイムズマシン

歴史が見えると、今が見える。

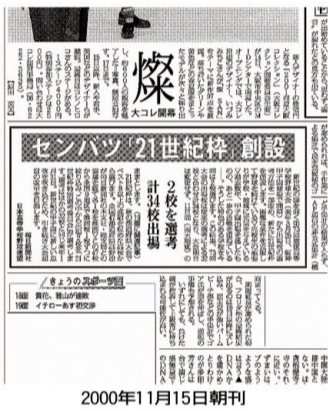


さあ、タイムズマシンに乗りこもう。
今日のテーマは？

センバツ

前年の関東大震災の傷あとがまだいえない1924年春、旧制中学校の野球の強豪を集めた新しい大会が誕生した。全国選抜中等学校野球大会。現在の選抜高校野球大会の旧名だ。さわやかな春を彩る野球のビッグイベントは、たちまち学生野球を愛する日本人の心をとらえた。戦前から「センバツ」の愛称で親しまれ、3月から4月にかけて開催されることから、「春はセンバツから」の名フレーズも生まれた。戦争による中断や大震災を経験しながらも、常に人々の心に春の息吹を吹き込んできた日本の春の風物詩は、21日、84回目の幕を開ける。今回はどんな春風が吹くことだろう。右上写真は2011年4月3日、閉会式で掲げられた「がんばろう！日本」の横断幕

2000-11
21世紀枠創設



特色のある学校を選抜



新世紀の扉を開く第73回大会から、出場校の

選考方法を一部改め、戦績とは別に特色のある学校を選抜する「21世紀枠」をスタートさせた。地勢、気候など困難な条件を克服して野球を続けている、学校や地域に元気を与えている、などの特色を持ち、前年秋の都道府県大会でベスト8以上の実績を残している学校(2校)が対象。選抜大会ならではの新鮮な軸で、センバツはその歴史に新たな一ページを刻むことになった。

？もっと知りたい！

従来の選考は、前年秋の地区大会の成績を重要な資料とし、主に戦力面や品位が対象になっていた。21世紀最初の大会にあたり、選考の範囲を拡大。実績はわずかに劣るものの、恵まれない環境を克服し、高校野球にふさわしい活動

を実践しているチームに甲子園への道を開く制度「21世紀枠」が誕生した。

地区大会に出場していない学校も対象に。同様の境遇にある学校に励みとするのが主な目的だ。初年度の73回大会は、「創立、創部とも県最古で、質実剛健の考える野球を実践している」安積(福島)と、「部員全員が地元中学出身で、地域貢献に取り組んでいる」宜野座(沖縄)が21世紀枠で出場。宜野座はベスト4まで勝ち進んだ。

当初は2校選出だったが、08年の80回大会から3校が選出されている。11年の83回大会までに計26校が21世紀枠で出場。今回は女満別(北海道)、石巻工(宮城)、洲本(兵庫)の3校が出場する。

1999-4
沖縄勢初優勝



42年目の悲願

第71回大会の優勝戦が4月4日、沖縄尚学(沖縄)一水戸商(茨城)で行われ、沖縄尚学が7-2で快勝。初優勝を飾ると同時に、沖縄勢として1958年夏の全国選手権に初出場して以来、42年目で全国制覇の悲願を成し遂げた。沖縄尚学は大会に入って、試合のたびに勝負強さを増し、準決勝でPL学園(大阪)に延長十二回の接戦の末、競り勝った勢いをそのまま優勝戦でも生かした。

？もっと知りたい！

沖縄勢が初めて甲子園の土を踏んだのは、



1958年夏の首里。当時は本土復帰前で、選手たちが持ち帰ろうとした甲子園の土が検閲にかかって、船上から海中に捨てられたのは有名なエピソードだ。センバツでは、その2年後の32回大会で那覇が初出場した。60年代後半から力をつけ、興南が68年夏ベスト4、沖縄水産は90、91年夏に2年連続で決勝進出を果たしている。

この日はまさに「沖縄デー」となった。地元那覇市内は優勝戦が始まるころから交通量がめっきり減り、商店街などではテレビの前の人だかりができた。優勝が決まると、琉球新報が本土復帰(72年)時の約5倍の号外を配った。フィーバーぶりは地元だけではなく、沖縄出身者が多く住む大阪市や兵庫県尼崎市でも祝賀行事が相次いだ。そして甲子園。沖縄尚学応援団が起こしたウエーブが、相手の水戸商応援団も巻き込み、スタンドを何周も回る珍現象。みんなが沖縄勢の優勝を祝った。

1995-2
阪神大震災復興大会



五つの理念掲げ開催

1995年1月17日、阪神淡路大震災が発生した。そのちょうど1カ月後、毎日新聞社と日本高校野球連盟は第67回大会の開催を決定した。被災地の兵庫県は復旧途上にあり、舞台となる阪神甲子園球場も被災してアルプスタンド、内野席に亀裂が入っていた。そんな中での大会開催には賛否が相半ばした。運営委員会は議論を重ねた末、「災害復興に寄与する大会とする」など五つの理念を掲げて開催に踏み切った。

？もっと知りたい！

阪神淡路大震災が起こったため、約2カ月後に始まるはずの67回大会は開催が微妙になった。阪神甲子園球場も被災、ライフラインの復旧もままならない状況で野球などやっていいのか、開催による交通渋滞が復旧を遅らせることにはならないか、など開催を疑問視する意見は少なくなかった。しかし、「楽しみにしている球児にプレーさせてやりたい」という地元住民の温かい声や、過去に暗い世相を忘れさせてきた高校野球の存在が開催決定を後押しした。開催にあたり、道路事情に配慮して、選手も応援団も球場までの移動は電車、路線バスに限定、一日の試合数を準々決勝を除いて3試合にするなど、数々の規制を実施した。こうして開かれた大会は、初陣の観音寺中央(香川)が制した。

その16年後に起こった東日本大震災では、甲子園は被災地ではなかったが、電力事情に配慮しながら83回大会の開催を決定。創志学園(岡山)の野山慎介主将が「がんばろう日本、今生かされていることに感謝して…」と見事な選手宣誓をした。

1978-3
初の完全試合



無名、小柄な投手が快拳

甲子園の高校野球で史上初めての完全試合が達成された。センバツ史が半世紀を刻んだ第50回記念大会。第4日の3月30日、1回戦の前橋(群馬)一比叡山(滋賀)戦で、前橋の松本投手は比叡山の打者27人を相手に1人の走者も許さないパーフェクト投球を展開。春夏を通じて初めて、センバツ通算1019試合目で生まれた快拳だった。

？もっと知りたい！

松本投手は身長168センチ、体重63キログラム。出場投手の中で最も身長が低く、まして甲子園の常連ではない進学校チームとあっては、前評判にも



前橋の松本投手(左)。センバツ初の完全試合を成し遂げた。ところが、比叡山戦のマウンドに立つや、制球のよさを生かした小気味よい投球で凡打の山を築いてゆく。七回ごろから「完全」を意識しだしたが、「四球だけ気をつけた」と、冷静に

ストライク先行の投球を崩さず、最後まで走者を許さず、投げきった。この快拳には、群馬出身の福田勉夫首相(当時)も「どうだ。わが郷里の名門だ」と鼻高々。前橋のライバル校、旧制高崎中(現高崎高)出身ながら、同郷の後輩の快記録にご満悦だった。

投球数わずか78。内野ゴロ17、内野飛球2、外野飛球3、三振5という内容。完全試合は松本投手が初めてだったが、無安打無得点試合(ノーヒット・ノーラン)は松本投手が史上10人目だった。

完全試合は16年後の66回大会(1994年)でも、金沢(石川)の中野真博投手が江の川(島根)戦で達成。今年、84回目を数える長いセンバツ史で、完全試合を達成した投手は、この2人だけである。

阪急阪神東宝グループ

センバツ特別展2012 記憶に残る 出場校特集 2/25日・4/5日

今大会出場の32校の紹介や、2009~2011年の選抜大会の激闘の様子を紹介します。「少ない部員での出場校」や「初出場・初優勝校」の特集も必見!



大会期間中「紫紺の優勝旗」を展示!!
展示期間についてはお問い合わせください
2/25~開会式前日まではレプリカを展示



写真提供: 毎日新聞社

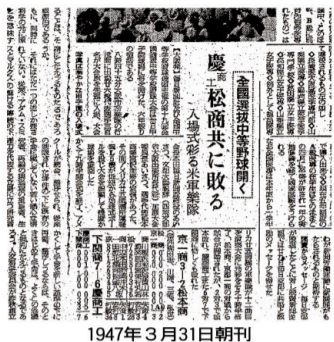
甲子園歴史館

- 入館料/おとな500円、子ども300円(4歳~中学生) 高校生300円 ※大会(甲子園練習日含む)期間限定!
- 場所/阪神甲子園球場 外周16号門横 (阪神電車「甲子園」駅下車徒歩8分)
- 営業時間/10:00~18:00(11月から2月は10:00~17:00) ※入館は閉館時間の30分前まで ※高校野球開催時など催し物により変動
- 休館日/月曜日(大会(甲子園練習日除く)期間中は無休)

<http://www.koshien-rekishikan.com>

甲子園歴史館 検索

6年ぶり 開会式には6万人

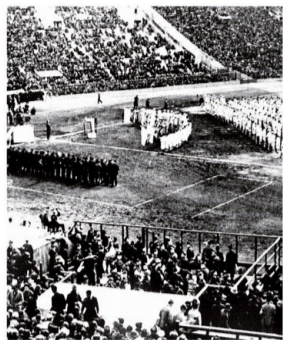


戦争により、1942年から休止されていた大会は、47年に再開された。同年3月31日の毎日新聞は6年ぶりに復活した第19回選抜中等学校野球大会開会式の模様を次のように報じた。「8時

四十五分大阪市音楽隊の行進曲に出場廿六校代表選手三百名が大会旗を先頭に入場。(中略)アメリカ廿師團所属軽翼L5機が低空から始球式ボールを投げ大会を祝福して幾度か球場を旋回した」

「もっと知りたい!」

夏の全国優勝大会は46年夏に西宮球場で復活大会が開かれた。当時、甲子園球場は連合国軍に接収されていた。毎日新聞社関係者は甲子園での選抜大会復活を目指し、同年冬から阪神電鉄の協力を得て、甲子園を接収する神戸の連合国軍司令部と粘り強く交渉を重ねた。苦勞は実を結んだ。連合国軍司令部を口説き落とし、47年1月に接収は解除され、大会再開に大きく前進した。その後、GHQ(連合国軍総司令部)の横やりが入るなど紆余(うよ)曲折はあったが、甲子園での大会復活が実現。3月30日の開会式には約6万人の大観衆で埋まった。戦争中に供出されたシンボルの鉄傘こそなかったが、「甲子園に野球が戻ってきた」。誰もが平和を実感した。



6年ぶりに復活したセンバツ、開会式には大勢の観衆が詰めかけた

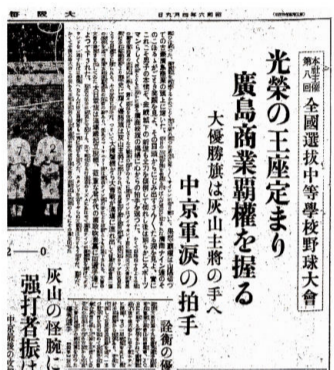
26校が出場した大会は、徳島商(徳島)と小倉中(福岡)の間で優勝戦が行われ、延長十三回の接戦の末、徳島商が3-1で競り勝って、戦後最初の優勝校となった。

第8回大会で初めて登場して背番号



第8回大会で初めて登場して背番号

広島商が快挙 背番号もお目見え



第8回大会は広島商(広島)の優勝で幕を閉じた。投手戦となった優勝戦は中京商(愛知)を2-0で破り、前年夏の第16回全国中等学校野球優

勝大会に続く史上初の「夏春連覇」を達成した。この大会では初めて背番号がお目見え、また、初の大会歌も誕生した。しかし、軍部の力が増大してきた時期で、背番号は洋数字、大会歌は1番の「オール日本」、2番の「ヤング日本」の英語使用が軍部を刺激して、ともに1年限りで姿を消した。

「もっと知りたい!」

この年、夏春連覇を果たした広島商は前々年の夏も制してあり、夏連覇に続いての快挙だった。当時、中等学校野球界では戦力が際だっていたことがうかがえる。

2011年までに夏春連覇を達成した学校は広島商(広島)、中京商(愛知・現中京大中京)、法政二(神奈川)、池田(徳島)の4校しかない。夏の優勝チームが新チームに衣替えするため、戦力に変化をきたすことが難しさとなって表れているようだ。夏春連覇

「大会、口でスケッチ」 臨場感も盛り上げ



第5回大会から、JOBK(NHK大阪中央放送局)が実況中継を開始した。同年3月31日の大阪毎日新聞は「大会の模様を口でスケッチ」と、独特の表現で初のラジオ中継の興奮を伝えた。開会式では、3人のアナウンサー

が実況するネット裏のマイクのほか、三塁側に新式のマルコーライツマイクを設置。これが集音マイクの役割を



第5回大会、ネット裏から初のラジオ中継

果たし、観衆の拍手、どよめき、大阪市音楽隊の演奏をもれなく拾い上げ、臨場感を盛り上げた。

「もっと知りたい!」

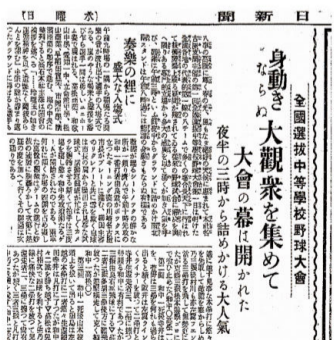
JOBKが初のセンバツ中継にける熱意は並大抵ではなかった。

開幕6日前から試験放送を繰り返し、通信省(現総務省)の試験に合格すると、開幕前日の3月29日までの3日間、6機の飛行機を飛ばして宣伝ビラ40万枚をまき、中継ムードを盛り上げた。

実況の中心となった魚谷忠アナは、1916(大正5)年の第2回全国中等学校野球優勝大会で、市岡中(大阪)の三塁手として準優勝の経験があった。そのため、大会第2日の市岡中-高松商戦を実況した時には、「市岡中に肩入れ過ぎだ」などの抗議手紙が届くとばかりも。

電波に乗ったセンバツは新たな一歩をしるし、その後、新日本放送(現毎日放送)が52年の24回大会でラジオ中継を開始。NHKのテレビ実況は54年の28回大会からスタートする。

出場8校 舞台は名古屋



1924(大正13)年4月1日午前10時、名古屋市八事(八事)の山本球場で、第1回全国選抜中等学校野球大会は開幕した。収容人員2000人、グラウンドは赤土、外野はトタン扉をめぐるだけの素朴な

舞台だったが、午前3時には早くも観客が詰めかけ、午前8時には南北両スタンドは膨れ上がり、あふれたファンは球場近くの丘に陣取った。早稲田実(東京)、横浜商(神奈川)、愛知一中(愛知)、立命館中(京都)、市岡中(大阪)、和歌山中(和歌山)、高松商(香川)、松山商(愛媛)の出場8校の選手がダイヤモンドを一周して、5日間にわたる熱戦が火ぶたを切った。

「もっと知りたい!」

これに先立つこと9年。1915(大正4)年に、大阪朝日新聞社が豊中球場で第1回全国中等学校野球優勝大会を主催し、年々、盛況になっていた。

既に明治時代から大阪・堺で健脚徒歩競走大会を主催するなど、スポーツ事業を手がける新聞社の先駆けである大阪毎日新聞としては、野球イベントの創設は最重要課題だった。と言っても、朝日の二番煎じは許されない。編



第1回大会の入場式の様子

毎日タイムズマシンの過去掲載分は<http://mainichi.jp/sp/140times/>でご覧になれます

1947-3
戦後再開

1931-4
初の夏春連覇

1928-3
ラジオ中継開始

1924-4
第1回大会

次回のテーマは「女性」
4月1日掲載予定

正解②

1998年に締結した「日米選手契約協定」。選手が入札制度による移籍を希望し、球団が認めた時の制度。過去にイチロー選手、松坂選手なども利用。③はサッカーで使われる制度。



毎日新聞創刊140年